延宝期大坂の町人社会における井原西鶴の位置
――『難波鶴』刊行の経緯

上　安　祥　子

はじめに

江戸時代の三都、京都・江戸・大坂にはそれぞれ、いくつもの案内記や地誌があるが、17 世紀後半の十数年のあいだに、あたかも三部作のごとく、『京雀』（寛文 5 = 1665 年）『江戸雀』（延宝 5 = 1677 年）『〔懐中〕難波すゞめ』（延宝 7 = 1679 年、以下『難波雀』）が世に出た。『江戸雀』の序文には、江戸に不案内な地方の友人に、江戸のことを教えてほしいと頼まれて書いたところ、「汝よくしれり、江戸雀にや」と言われた、それで『江戸雀』という書名にした、というエピソード（もしくはそういう設定）が記述されている。「雀」は“物事や事情に詳しい人、精通している人”の意味で使用されている。

ところが『難波雀』の場合、3 月の刊行後まもなく、5 月に『〔増補〕難波すゞめ跡追』（以下、『難波雀跡追』）が刊行され、さらなる増補改訂版として 7 月に刊行されたのは『難波鶴』だった。なぜ、「鶴」なのか。

大坂の一連の案内記は、塩村耕氏によって翻刻され、詳細な書誌的検討もなされた[1)]。それは、『難波鶴』以降の案内記も含めて、『難波雀』の“類書”として概要を紹介された岩橋小彌太氏[2)]、伝本の校異を紹介された佐古慶三氏[3)] 以来、断片的にしか言及されてこなかったなかで発表された労作である。しかし、各案内記の成立の経緯や相互の関連について、充分な検討が尽くされているとは言いがたい。

そもそも『難波雀』は、城代や各奉行などが誰であるか、どこの町に、如何なる業種・職種・職能の、なんという店や職人や専門家がいるのか、というデータを集約し、紹介する書物である。現代でも、もっぱらその時期の店や職人の所在確認に利用され、個々のデータが重視されているように思われる。それは『難波雀跡追』・『難波鶴』、そのあと刊行された『難波鶴跡追』（以下、『鶴跡追』）も同じであり、新たな項目が増補された場合に、なぜその項目が加えられたか、といった視点からの検討はされてこなかった。

目録をみると、『難波雀』の項目数は 150、『難波雀跡追』も 150 だが、それに加えて項目番号を付していない増補項目が 40 ある。『難波鶴』は 243 項目であるから、単純に計算すれば『難波雀跡追』より 50 項目ほど増えている。40 と 50、増加の度合いにさほどの差はないが、増補の仕方が異なる。

『難波雀跡追』は、たとえば「北国買物問屋[4)]」のように、項目そのものを新しくつくった場合もあるが、「江戸買物問屋[5)]」のように、『難波雀』にすでにあった項目について、同名の項目を別の箇所にも挿入して追加データを掲げる、あるいは「謡ノ師[6)]」のように、「諸商人諸職人売物所付」という項目のなかの、小項目として追加する、といった増補を含めて 40 の追加であり、まったく新しい項目が 40 増えたのではない。したがって、『難波雀』の編集方針自体を変更するほどの改変ではない。

しかし、『難波鶴』の場合、たとえば「さやし[7]」「草子屋[8]」のように、『難波雀』と『難波雀跡追』では項目がなく、「諸商人諸職人売物所付」の中の小項目としてもなかったものを新たに追加したり、「弓屋并矢師[9]」や「経師屋[10]」のように、「諸商人諸職人売物所付」の中の小項目だったもの[11]を、新たな項目として追加したり、といった増補であり、『難波雀跡追』とは方針が違う。なおかつ、詳細は後述するが、『難波鶴』で増えた項目の職種には特徴がある。

また、原題簽に『難波鶴〔大坂鑑／絵入〕』とある[12]ように、挿絵という新たな要素が加わっている。なぜその挿絵を入れたか、ということはこれまで問いすら発せられてこなかったようだが、挿絵の選択や挿入位置も、解読すれば意図が見えてくる。

本稿は、『難波鶴』がなぜ難波「鶴」であるのか、という問いを起点に、同書がいかなる経緯と意図で編纂されたかを明らかにする。そしてそれを通じて、当該期の大坂の町人社会のありようの一端を明らかにしたい。

Ⅰ　雀から鶴へ

鶴はどういう経緯で、雀にかわって、登場することになったのか。『難波雀跡追』『難波鶴』『鶴跡追』の序文は、いずれも先行書にふれており、一連のものとしてとらえることができる。

まず『難波雀』では、繁栄している大坂は、道案内がなければわかりづらいとしたうえで、次のように文を結ぶ。

> 予卜居のいとま大川筋の流を窺てミなもとを尋ね、横堀の浅を汲て塵芥をかきあつむ。名て難波すゞめと云。其天満大坂をふたつの翅としてよろづの事を囀るものなりし。
> 于時延宝七己未陽月下旬於京洛旅館序　吉備国水雲子[13]

大坂のありとあらゆることを調べつくし、せっせとおしゃべりするので『難波雀』、というのは、『江戸雀』をふまえたものであろう。ただし、この雀、江戸雀が江戸っ子もしくは長らく江戸に住む者らしいのとは事情が違う。吉備出身で、住居をさがす合間に大坂のことを調べたと言う。

板元は「京堀川小嶋屋長右衛門」と「大坂しんさいはし筋古本屋清左衛門[14]」の相板である。清左衛門は、刊記に板元として登場するだけで、『難波雀』の本文中には書肆として名前があがっていない。本屋・書物屋・草子屋・浄瑠璃屋といった項目がないのである。「諸商人諸職人売物所付」には小項目の「ほ」に「本屋」と「同（本屋）古本」があり、後者に「真斎はしすぢ」とはあるが、個々の店までは載っていない[15]。

この古本屋清左衛門は北田清左衛門であり、刊行の実績もないわけではない[16]が、「実質的には京版であり、編集製作も多く京人の手になったものと思われる[17]」という指摘のような事情があると思われる。

つぎに、『難波雀跡追』の序文は次のように語る。

> 往還の旅客の知へとて、先人已に難波雀に岐路を囀らしめ、世にたすけとす。然ども、未美をつくさざるものあれバ、予糸染の嘆もだしがたくて、今又上高家諸士より下百工商賈及所士遊

芸のもろ人まで、悉尋求て梓にちりばめ世に伝ふるものなりし。
于時延宝七歴五月／難波隠士書之[18]

「難波隠士」は『難波雀』のできばえに不満があるらしい。『難波雀』の「水雲子」は、調べを尽くした、という意味で「大川筋の流を窺てミなもとを尋ね、横堀の浅を汲て塵芥をかきあつむ」と書いたのだろうが、「難波隠士」からすれば、リストアップされるべきものが抜け落ちているのである[19]。それを「塵芥」にかけて“美をつくしていない”と表現した。そして、「水雲子」が見過ごしたものをひろいあげて調べを尽くし直すために、「上高家諸士より下百工商賈及所士遊芸のもろ人まで、悉尋求」た。「美」に、身分の上下や職種は関係がない、と言っているようである。

「糸染の嘆」は、墨子の故事にもとづく表現である。白い糸が黄にも黒にも、つまりどんな色にでも染まるように、人の心が環境や習慣などの影響で善くもなり悪くもなることを墨子が嘆いた、という。道に迷わないように雀が大坂の道案内をしても、“美をつくしていない”のだから、墨子のようにどちらへも行けると泣くこともできない、というようなことだろうが[20]、ややわかりづらく、唐突にも思える。だが、故事をもう一つふまえれば、『難波雀』と『難波雀後追』の序文はつながるのである。

楊子見逵路而哭之、為其可以南、可以北。墨子見練絲而泣之、為其可以黄、可以黒[21]。

前半の、四方八方に通ずる道の、北にも南にも、つまりどちらへも行くことができるように、人が善くなることも、悪くなることもできると楊子が泣いた、という故事が、後半の墨子の故事と対で語られている。『難波雀』は、道に迷わないように大坂を案内する、としていたが、『難波雀跡追』は、道に迷う、ということからわかれみちを連想することによって、楊子、さらには墨子の故事へとつなげているのだ。この墨子の故事への連想の飛躍が、「鶴」へと着地する次の連想をひきだし、『難波鶴』となるのである。

その「鶴」については、まず口絵に注目しなければならない。といっても、表紙見返し[22]に描かれた鶴そのものではない。添えられた「難波潟あしへは冬のけしきにてかハらぬものは鶴の毛衣」（『俊成家集』）という、藤原俊成の歌のほうである。

「難波潟」は歌枕であり、景物に蘆が詠まれることも多い。そして蘆と鶴はよくある組み合わせだ。だが、『難波鶴』が季節感を重視する書ではないにしても、序文は「遣水[23]」という夏の季語があるように「林鐘（＝６月）中旬[24]」の作、刊記は７月[25]、ことさら冬の光景を詠んだ歌である必要はない。それにもかかわらず、冬の歌である。なぜなのか。

理由は、序文の終わりにもつかわれている、「鶴の毛衣」である。「鶴の毛衣」とは、文字通り鶴の羽毛を衣にたとえたり、慶賀の意をこめて鶴そのものをさしたりするほか、白い着物、愛情をこめて着せた産着、という意味もある。ここで思い起こされるのが、『難波雀跡追』序文にあった、墨子の故事、「糸染の嘆」である。墨子の名は翟、翟は雉である。そして、深い親子の愛情をたとえる表現に「焼け野の雉、夜の鶴」がある。案内役は雀から雉を経由し、鶴へと辿り着いている。

さらに、「鶴の毛衣」には、「鶴の羽毛で綴ったという隠者の衣服」という意味もある。『難波鶴』序文の署名は「難波隠士友月翁[26]」、つまり隠者である。『難波雀跡追』の序文署名も「難波隠士」だったが、隠士ならば雀ではなく鶴だと、さらに連想が重ねられたのだ。

では、鶴は雀をどう評しているのか。

> 片紙の一冊を見れバ難波雀と号す。しバしバ巻舒して是をこゝろむるに、わが住つの国の風流掌の中に有。（中略）。京雀にはまさりやおとりやしらずかし。（中略）書残したる事共をくハへ、かづかづの誤りを改て、後見ん人にふミまどハせしとて、今ハたおなじ難波鶴と題して、楊州の願ミち、千年の楽、万年硯に筆をしたてゝ、替らぬ物は鶴の毛衣と有し彼卿の佳詠に此集を祝して、以て詞書をなし終りぬ[27]。

『難波雀跡追』には言及がなく、『難波雀』について、風流もあるとはしつつも、「片紙」（＝紙切れ）扱いである。『京雀』も意識しているようだが、比べる以前に、『難波雀』には「書残し」や「かづかづの誤り」があり、それらをすべて解消することが『難波鶴』として満願した、それを「楊州の願ミち」と表現している。これも連想による飛躍である。ひとりでいいことを全部手に入れようと願うことのたとえに「楊州の鶴」という、梁の殷芸の「小説」に書かれた故事がある。ここは難波の鶴が、揚州の鶴が願ったように、全部手に入れる、つまり『難波鶴』が『難波雀』の不備を指摘し、それを改良して完成させる、それが願いにとどまるのではなく、成就したと、宣言しているわけだ。

しかし、『難波鶴』で終わりとはならず、『鶴跡追』が刊行され、序文はこう語る。

> 難波すゞめ、ちうちうと囀りくさしてより、同跡追の、一おどり一拍子違へて、又なにハづるの、口ばしこまかにきいたれど、ひとつふたつとりおとしたる餌をひらひあつめて、今、難波鶴跡追と名付て開板せしめ、世の宝とする物也[28]。

『難波雀』に比べて『難波鶴』は神経が行き届いてはいるが、それでもいくつかミスがあるという。だが、『難波鶴』の不備よりは、『難波雀』に批判の矛先が向いているようで、「囀りくさす」などという表現がつかわれている。単に「くさす」ならば、雀の囀り＝記述が、大坂をけなしたということになるが、囀りくさす、となると、囀りそこなう、あるいは囀るのを途中でやめる、というような意味になる[29]。

また、『鶴跡追』にも『難波鶴』同様に、鶴の口絵に歌が添えられているのだが、それが「乱れあしの葉末の月の寒るにはしのふにすれるつるの毛衣[30]」である。「しのぶにすれる」は「しのぶ摺り」、つまりは「しのぶもじずり」、忍ぶ草の染めの模様から、「乱れ」を連想させる定番、あるいは、「忍ぶ」という行為にかけてつかわれる語である。雀の不十分で調わないおしゃべりは困ったもので、跡追いの雀の拍子がずれた踊りもいただけないが、ひととおり我慢して聞いた、とでもいうことであろう。それに比べて、鶴が餌をひとつふたつとりこぼすぐらいはご愛敬、である。その落とした餌をひろい集めるのは、鶴をまねる跡追いではなく、まさに跡を追ったあとかたづけ、つまりは雀にはじまった大坂の案内に、一応の幕引きである。ただし、現存する『鶴跡追』の伝本は乱丁、項目の見出しがないなど、およそ世の宝とするにはどうかと思われるできあがりである。

雀から鶴へと続く一連の案内記の序文は、道案内するという『難波雀』、そこからわかれみち、そして墨子の故事を連想した『難波雀跡追』、その墨子から鶴を連想した『難波鶴』という、連想の飛躍でつながっている。それは、あたかも、連句の発句、脇句、第三のようであり、『鶴跡追』はさし

ずめ挙句ということになる。挙句は祝意をこめてあっさり詠むものである。『難波鶴』が『難波雀』と『難波雀跡追』から変更した点を、『鶴跡追』がすべて踏襲したわけではなく、むしろ『難波雀』や『難波雀跡追』に似ている部分が多いのも、『難波鶴』のあと、時間をおかずに刊行することのほうを優先したためだとも考えられる。乱丁もそのあたりに原因があるだろう。

刊行された時期と舞台は、談林俳諧の最盛期だった、延宝期の大坂であることを考えれば、連句に見立てるといった趣向は大いにあり得る。また、雀に対する遠慮会釈ない鶴の語り口から、鶴が誰であるか、具体像が浮かぶ。井原西鶴である。

Ⅱ　難波の鶴

難波の鶴といえば西鶴、それはおそらく、次の一節で印象づけられた。

> 賤も、狂句をはけは、世人阿蘭陀流なとさみして、かの万句の数にものそかれぬ（中略）そしらは誹れ、わんさくれ、雀の千こゑ鶴の一声と、みつから筆を取てかくはかり[31]

『生玉万句』（寛文13年＝1673）の序文である。「さみする（狭みする）」、つまり誹謗である。新しい俳風を受けとめきれずに誹るという、当時の俳壇の狭さがあった。それに対して西鶴が、「わんさくれ（わざくれ）」＝どうでもなれ、とは言いつつも、「雀の千こゑ鶴の一声」と切り返している。

「雀の千こゑ鶴の一声」は、俳諧論の書『毛吹草』にも挙げられた[32]俚諺である。『毛吹草』は「此書初心仕ならひのためには比類なき重宝の物、はじめて編集仕ける故、諸人是をもてはやし、世に鳴事夥し[33]」と評された。刊行は正保2年（1645）と考えられており[34]、『生玉万句』のころには、「鶴の一声」は、よく知られた慣用句であっただろう。西鶴（当時は鶴永）が矜持を語るに、格好の表現である。周囲の者たちも、西鶴を鶴、あるいは難波鶴と表現した句を詠むようになる。たとえば次のようなものである。

Ⓐ　おもひやれ鶴の一声無常鳥[35]　（追善発句・山本季延）
Ⓑ　あやかれよ鶴の一声時鳥[36]　（発句・友吟）
Ⓒ　奇妙の鶴方便の弓大矢数[37]　（発句・宗先）
Ⓓ　大矢数是にはつれし難波鶴[38]　（発句・久永）
Ⓔ　これ迄の花は奢の難波鶴[39]

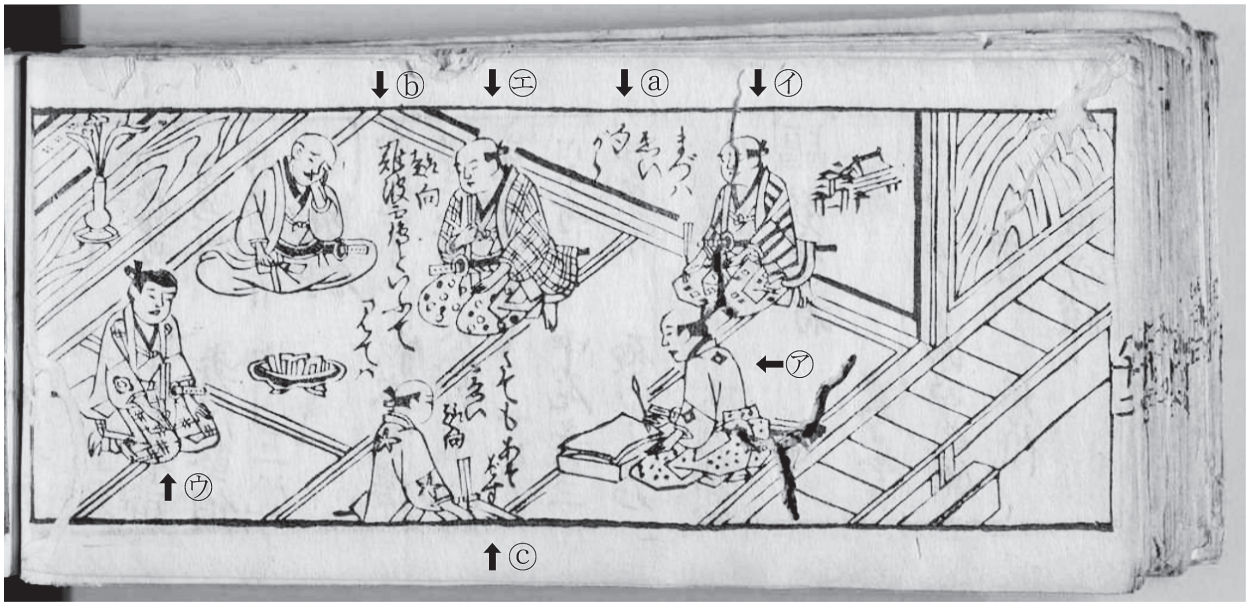
Ⓐは、西鶴が亡き妻の追善で行った独吟（1675＝延宝3年）に寄せられた句である。「鶴の一声」は、妻を亡くした西鶴の悲痛な声、といった意味であるが、「雀の千こゑ鶴の一声」という慣用句があってこその表現である。Ⓑ～Ⓔは1日4000句の矢数俳諧を興行した際のものである。Ⓑは西鶴の詠吟を鶴の一声、と表現している。

Ⓒ～Ⓔが「難波鶴」の例である。Ⓒは賦物であり、「難波何」という題の発句で、「何」を、句に詠み込んだ「鶴」と置き換えて「難波鶴」となる。矢数俳諧を興行している西鶴の技量を、他の追随を許さないものとたたえており、当然、「難波鶴」は難波の鶴、西鶴である。Ⓓもよく似た内容の

句である。Ⓔは名残裏七句、花の定座にあたる。西鶴本人が、ここまでの速吟で花の句もたくさん詠んできたことをふりかえり、贅沢なことだと感慨を述べ、「難波鶴」を自称している。

この矢数俳諧が行われたのは、『難波鶴』刊行の翌年、延宝８年（1680）である。「難波鶴」という表現は、案内記の『難波鶴』をふまえてのことなのだろうか。それは、真似であるとか、二番煎じとかいった意味ではあたっていないが、『難波鶴』の趣向を取り入れているという意味ではあたっている。

じつは、『難波鶴』が「難波鶴」たる所以は、『難波鶴』のなかに記されている。ただし、序文でもなく、本文でもない。挿絵である。それは、八十二丁オが「連歌師」という項目名のみでおわり、八十三丁オが項目内容の最初からはじまる、その間に挿入されている[40]。つまり、見開きの状態で右の丁が挿絵、左の丁に連歌師３人全員の名前があり、続いて「俳諧点者」となる。



〔「俳諧点者」の挿絵〕『難波鶴』（国立国会図書館所蔵、請求番号：本別 15-18[41]）
※国立国会図書館デジタルコレクションより転載。

挿絵に描かれている人物は６人、紙を前にして筆をもっている㋐は、執筆であろうことからすると、３人しか名前があがっていない「連歌師」ではなく、「執筆」が同じ項目番号のなかにまとめられている「俳諧点者」の挿絵であると考えられる。

書き込まれた会話には、「まづハゑい句がら」（ⓐ）、「趣向難波鶴といふて見てハ」（ⓑ）、「さてもあそばすゑい趣向」（ⓒ）とある。つまり、句会に見立てて、『難波鶴』命名の瞬間が描かれているのである。

これは、『難波鶴』は俳諧点者が立案した、ということをあらわしている。かくもはっきりと描かれているにもかかわらず、また、西鶴作品の注釈などでは、西鶴のことを「難波鶴」と表現する句があることが解説されているにもかかわらず、『難波鶴』の成立については、管見の限り、俳壇や西鶴との関連が指摘されることはなかったようだ[42]。

挿絵そのものの光景が、実際にあったかどうかは別として、『難波鶴』を企画したのは、俳諧点者の人びとであり、その中心に、難波の鶴、井原西鶴がいたのだ。西鶴が主催する矢数俳諧で発句を詠む人物であるならば、『難波鶴』刊行の経緯を知っていたと思われる。だからこそ、前掲Ⓒのよう

に、「難波何」の賦物で、鶴を詠み込んだのである。

では、描かれているのは誰なのか。たとえば、㋑は、羽織の柄が竹ならば、貞竹堂の井口如貞と解することが可能だ。如貞は「俳諧点者」の3人目にあげられている、大津如貞であり[43]、さらには「廻船年寄」「材木京問屋」「北国材木問屋」「舟板問屋」「日向材木問屋」「梶めうしろかい樫木類問屋」に、阿波座堀の大津屋勘兵衛として名前がある[44]。

また㋒の袴の柄を「井」とみれば、容易に井原西鶴が連想される。羽織の模様も、西鶴の肖像画[45]にある、丸に花菱に似ている。一方で、㋓の羽織も、「井」に見えなくもない。ただし、㋓の場合は、翁格子で西山梅翁、と解釈できる余地がある。

いずれにしても、頭髪など[46]ほかの条件もあわせて考えると、ひとりひとり明確に特定の誰かを描いたというよりは、誰かを連想させる要素をちりばめた、と見るべきだろう。

なお、雀との対比だけでなく、先にあげた「焼け野の雉、夜の鶴」であらわされるような深い親子の愛情という意味でも、西鶴は難波の鶴である。亡くした妻との間には3人の子供がいた。追善の独吟に「惣鳴や山ほとゝきす夜の鶴[47]」（和気遠舟）という句が寄せられている。心を子供に遺したであろう故人を「夜の鶴」と詠んだのであろうが、西鶴もまた、「夜の鶴」であったはずである。

ここで、雀と鶴の、一連の案内記の序文の署名に注目してみたい。4種の案内記を、先述したように連句に見立てるならば、『難波雀』は「吉備国水雲子」による発句、『難波雀跡追』は「難波隠士」による脇句、『難波鶴』が「難波隠士友月」による第三となる。実際の連句ならば、歌仙や百韻といった形式があり、4句で終わりはしないが、案内記の一区切りとして『鶴跡追』を挙句と見立てるなら「執筆」が担当、それが「芦雪」である。

「吉備国水雲子」と、わざわざ他国出身を名乗る、あるいは他国出身を明かす、しかもそれが「吉備」であるとなると、『難波雀』刊行の前年に岡山から大坂へ移った岡田惟中[48]であろう。発句は句会に招かれた客が詠むものであり、惟中はまさに吉備から来た「客」である。

「於京洛旅館」については、先にも挙げたように「実質的には京版であり、編集製作も多く京人の手になった」ならば、編者の惟中が京都に滞在して作業を進めたのだろう。『難波雀』刊行の翌年に、惟中と論争[49]を展開した「難波津散人」が、「此評判（惟中に対する難波津散人の論駁書）出す事を聞て、信斎橋の板木屋について居て、板一二枚づゝ見ては、跡さきとなく、いそぎほらせし事、明白也[50]」と書いたのも、著者が板木屋につめるといったことが、当て推量ではなく、惟中が京都に滞在して『難波雀』の編集作業を行ったことをふまえているとも考えられる。

また、「塵芥」という語句に関して言うと、惟中は自作の句を「瓦礫[51]」と表現した例がある。『難波雀』序文の「塵芥」と、自作の句について謙遜の意味で用いた「瓦礫」とでは、シチュエーションが違うが、用語のセンス・傾向としては、似ていると言えなくもない。

次に『難波雀跡追』の「難波隠士」は、「難波津隠士[52]」や「難波津散人[53]」を名乗ったことが確認されている片岡旨恕、あるいはまた、同じく「難波津散人[54]」の使用例がある伊勢村重安が候補となる。

これに関しては、先にもふれた論争[55]が一連の案内記刊行の翌年ということもあって、惟中を論駁・論難した『俳諧備前海月』の作者「難波津散人」と同一人物かと思われる。その「難波津散人」については、片岡旨恕か否かについて論じられてきた[56]。確定には至っていないが、旨恕の可能性が高い。

また、『俳諧備前海月』は、惟中を「己智あるとたかぶり」「無実虚矜のふるまひ」だとし、水母

に骨があるといった体でおかしい、として、論駁の書を『俳諧備前海月』と名づけるとしているのだが、『難波雀』の「吉備国水雲子」が惟中だと知っていたからこそ、行脚や漂白の「水雲」から水雲＝もずくを連想し、水雲を気取ってももずく、否、むしろ海月だとした、とも考えられる。

「芦雪」は、青木友雪であろう。『難波雀』でも『難波雀跡追』でも、「俳諧点者」には名前が挙がっておらず、『哥仙〔大坂／俳諧師〕』（延宝元年）や『古今俳諧師手鑑』（延宝４年）にもリストアップされていない。しかし、『難波鶴』で、特に「檀林」として俳諧点者に加えられている。これは『難波鶴』刊行の前年、延宝６年３月に、友雪が西鶴らを招いて３日間で千句を詠み、『大坂檀林桜千句』として刊行したこと、その序文で「大坂檀林」を名乗ったことを反映していると思われる。

また、延宝７年４月には、友雪の願いによって西鶴との両吟で一日千句を詠み、５月に『両吟一日千句』を刊行している。友雪の序、西鶴の跋文からは、師弟のような関係性がうかがえる。友雪は『生玉万句』で執筆の一人だった青木藤兵衛友浄で、はやい時期から西鶴の側にいたようだが、『大坂檀林桜千句』や『両吟一日千句』で西鶴が友雪を一人前と見做した、ということだろう。『鶴跡追』では、友雪の名が「俳諧点者」の項目から消えている[57]のは、友雪の謙遜、つまりは『鶴跡追』が友雪の編になることを示しているのではないか。

Ⅲ　『難波鶴』の挿絵が意味するもの

『難波鶴』は、243の項目に対して挿絵は13枚と、分量が少なく、選ばれた項目・配置はかなり偏っている。それだけに、なぜその挿絵なのか、という問いを立てる意味がある。

挿絵は次の通りである。タイトルは、図中に書き込まれた語句を使用した場合は「　」で示した。

①「といや」の図（三十丁オ）[58]。
②「町上るりかたる所」（六十三丁ウ）[59]。
③俳諧点者の図（八十二丁ウ）[60]。
④山車を曳く図、２枚（八十五丁ウと八十六丁オ）[61]。
⑤鍛冶の図（九十二丁ウ）[62]。
⑥検校が診察している図（九十四丁ウ）[63]。
⑦「天満天神祭／くわんぎよの所」の図２枚（百四丁オとウ）[64]。
⑧風呂屋の図（百二十六オ）[65]。
⑨芝居町の図（百二十八オ）[66]。
⑩「新町よみせの所」の図２枚（百二十九丁オとウ）[67]。

①は「同（諸大名）御知行付」の途中に挿入されている。蔵屋敷の光景であろう。看板らしきものに「といや」と書かれ、店先が船着き場になっている。西鶴が紀州藩蔵屋敷の名代を勤める日野屋庄左衛門だったという説[68]があり、西鶴や西鶴の周囲の俳人たちの句にも、蔵屋敷の光景や大名などが詠まれている。

挿絵の挿入位置は萩藩の途中だが、萩藩を注視させようとしているのか、それともこの挿絵と見開きになる丁に全項目が載っている尼崎藩がねらいなのか、複数の藩を兼任している「名代」や「蔵

本」も多く、判然としない。尼崎藩蔵屋敷の名代「加嶋や教西」（加嶋屋正教）ならば、鴻池と並ぶ豪商である。

挿絵の荷に、一つだけ、丸に十字の島津の紋にも見える印があり[69]、それならば、蔵屋敷があったのは薩摩島津の分家、佐土原藩であるが、名代や蔵本は空欄である。『難波鶴』刊行時期の当主、第５代久寿は、先代藩主なきあと、跡継ぎが幼少だったために、つなぎとして家督を相続し、藩主として数えられないことも多い。そのような事情を暗示しているのだろうか。

②は、「木蝋問屋」と「鮫問屋」の間に位置する。見開きでみれば右に挿絵で、左に「鮫問屋」「京薪買問屋」「薪問屋」が並ぶ。項目名だけみれば、どの問屋も浄瑠璃とは関連がなさそうだが、そうではない。木蝋問屋に名前があがっている、「備中　同（北はま）十三人町 淀屋三右衛門」は、「たばこ問屋」にも「同（西国）同（北はま）十三人町　淀屋三右衛門[70]」とあるほか、「町浄瑠璃并だうけ諸芸」に「文弥風 伏見常盤町　たはこや 三右衛門[71]」とあり、図中にある「町上るりかたる所」に出入りする演者である。文弥風ということは、岡本文弥に特徴的な泣き節を得意としたようだ。

淀屋は『日本永代蔵』（巻一「浪風静に神通丸」）にも「久しき分限」のうちの一軒として、登場する。初代常安のあと、実子の言当、通称三郎右衛門が大坂の町人蔵元の開祖となり、総年寄も勤めた。この言当の家系、淀屋橋家は驕奢のため宝永２年に闕所となる[72]。『難波鶴』の三右衛門は常安の養子、善右衛門の次子の家系で、大川町家二代目の言直である[73]。

挿絵の左端には盤双六をしている人びとも描き込まれている。たとえば、西鶴の『男色大鑑』では賽の音が描写されているだけだが[74]、賭博として行われることが多かった遊戯である。ここでも「三ばん一とくのせうふじやそや」と、それらしい詞書きがある。

『難波雀』には「諸芸師」の項目に「浄瑠璃　文弥」とあり[75]、また「浄瑠璃座」のなかに文弥が活躍した「出羽」もあがっている[76]。「水雲子」は浄瑠璃という芸能、そして文弥の才を認めたのだろう。しかし、『難波鶴』が新しくもうけた「町浄瑠璃并だうけ諸芸」にあたる項目はなかった。「町上るりかたる所」は、盤双六という賭博を示唆するものが描かれているように、独特な活気をもった空間であったようだ。浄瑠璃という芸が人びとのより身近なところで披露され、愛される、そうした場をすくいあげるような視点は、「水雲子」にはなかった。それが「難波隠士」の言葉をかりれば、“美をつくしていない”ということになる（ただし、『難波雀跡追』にも「町浄瑠璃」という項目はないが）。

③は前章で論じた通りである。

④の八十五丁ウの図中の「これハしのだづまじゃ」は、曳いている山車に載っているからくり人形のことと思われる。説経節や浄瑠璃の作品「信田妻」は、この『難波鶴』刊行前年の延宝６年２月に、山本九兵衛から山本角太夫の正本が刊行されている。水谷不倒氏によれば、「機巧浄瑠璃派の傑作であるのみならず、普通の正本としても、稀に見る名篇[77]」である。板元の山本は、もとは京都だが、大坂の高麗橋に出店し、竹本座の浄瑠璃本の版権を握っていた。『好色一代男』にも、吉原の太夫そっくりにつくらせた信田妻の人形が登場する[78]。

八十六丁オの「かごぬけ」は、文字通り籠をくぐり抜ける芸だが、延宝年間に長崎から大坂に伝わった[79]話題のものであったらしい。そしてまた、談林俳諧の〈抜け〉の手法と「かごぬけ」とが重ね合わされることも珍しくはなかったという[80]。

次は、⑤より先に⑥について検討しておく。⑥は「正月門松飾りもの売場」と「七月聖霊棚かざり物売場」の間に挿入されており、見開きでは、右の丁に挿絵、左の丁は「七月聖霊棚かざり物売

場」からはじまり、「検校」、「勾当」、「座頭之中三味線上手」と続く。ただし、「七月聖霊棚かざり物売場」は場所のみの記述であり、挿絵とは関係がない。

向かい合って座った相手の左手をとった人物が伝えているのは、「腎虚」という漢方で用いる病名であり、描かれているのは診察の場面である。そのためか、『鶴跡追』では、この同じ挿絵が「医者」のところに挿入されている[81]。だが、この挿絵は、診察する側が患者と視線をあわさず、大きく首をかたむけ、全身の感覚を研ぎ澄ますような仕草で描かれており、視覚障害者[82]であることを表現したものと思われる。したがって、医業にたずさわる検校か勾当、おそらくは前者を描いている。

なぜ、この挿絵なのか。西鶴について、伊藤梅宇が「一女あれども盲目、それも死せり[83]」と記している。ただ、梅宇が西鶴や娘を直接知っていたのか、あるいは伝聞なのか不明であること（西鶴が死去した年、梅宇は10歳）、西鶴の死去から半世紀ほどたって書かれた随筆の一節であること、ほかにこの内容を伝える確定的な史料は知られていないことなど、注意が必要だが、『難波鶴』の編者が西鶴だったのなら、数少ない挿絵の一つにこの場面を選び、また新たに「座頭之中三味線上手」を加えたのは、身近に視覚障害者がいたことをうかがわせる。

ただし、視覚障害者すべてが医療を生業としたわけではなく、高利貸し、あるいは芸能など、さまざまな職にたずさわった。杉山和一が鍼医として成功し、やがて将軍綱吉にもひきたてられたのはまさに『難波鶴』の前後の時代であるが、女性の視覚障害者の場合は、主として芸能を生業としていた。娘が視覚障害だったとして、西鶴が彼女の将来をどのように考えていたかは、いまのところ明らかではない。今後の課題の一つとしておきたい。

ところで、「腎虚」だが、俳諧や草子類などでは「腎水（精液）が涸渇し、身体が衰弱すること。房事過度のためにおこる衰弱症」（『日本国語大辞典』）という意味でつかわれることが多い。西鶴も『好色一代男』など、関連づけやすいと思われる作品のほか、句にもそうした意味での「腎虚」や、それに類する言葉を取り入れている[84]。だが、この挿絵では、患者に酒量について忠告しているだけである。

本来、「腎者、主蟄、封蔵之本、精之処也[85]」といったように、腎＝腎臓は、精＝精力・精気という、身心の力をたくわえおく臓器ととらえられ、その機能不全は、房事過度による衰弱といったことに限られるものではない。そして、好色を語るばかりが西鶴ではない。『武道伝来記』巻五「枕に残る薬違ひ」のように、「腎虚」にかかわる話だが、好色に起因・帰結しないものもある。この話の中に登場する診断書が医学書にもとづいて書かれていることから[86]、西鶴はそれなりに医学方面の知識や見識をもっていたことがわかる。挿絵も、「腎虚」を判断する診脈は左手でとる[87]ことを表現しているように、細部にも注意がはらわれている。

⑤であるが、数ある職人たちのなかで、なぜ、鍛冶なのか。『難波雀跡追』の増加項目の一つが「大坂受領鍛冶[88]」であり、41人にのぼる刀工が列挙されたが、『難波雀』には「鍛冶」という項目すらない。「塵芥」まで集めたという「水雲子」には、リストアップすべき職能・職人とはとらえられなかったわけである。『難波雀』で刀がつくのは、「小刀包丁中買[89]」だけである。「難波隠士」が言う“美をつくしていない”、の一端は、ここにもある。『難波鶴』では「受領刀脇指鍛冶」という項目名で42人を挙げたうえに、さらに「受領鍛冶之外上手分」「箭根鍛冶」「大工道具鍛冶」「小刀屋同銘師」「刀脇指ほり物屋」「刀脇指きづなをし」として合計16人の職人と2種の町筋を紹介している[90]。

西鶴について、「刀工または刀剣小道具工匠子孫[91]」という見方を前田金五郎氏が示された。西鶴

が当時居住していた鑓屋町[92]が、刀工や鞘師などの住人がいる町であること、『好色一代男』の板元が「荒砥屋」という、刀工などと密接な関係が深い職種であること、その『好色一代男』の跋文を書いた水田西吟が刀工の流れを汲む可能性が考えられ、そのルーツとして想定される備中水田の近くに井原という地名もある、といったことがその根拠である。その後、野間光辰氏によって、西鶴と交流があった下里知足の記述から、西鶴が日野屋庄左衛門ではないかという発見がなされ、それを林基氏が詳説された[93]。前田説、野間－林説のいずれも蓋然であり、そして両説は両立するものと思う。

『難波鶴』の編者が西鶴であり、その西鶴のルーツが刀工もしくはそれに関係するものだとすれば、鍛冶やそれに類する項目の新設・充実は、もっともなことである。『難波鶴』で新たにたてられた項目には「江戸小刀包丁問屋」「小刀剃刀問屋」「大工道具問屋」「刀屋」「とぎや」「さやし」「さやぬし」「つか巻きや」「さめや」「金具や」「具足屋」「弓屋」「あら物屋」「あかがね細工」といったものがある。こうした方面への目配りが利いているところが、『難波鶴』の大きな特徴である。

序文署名の「友月」は、あるいは西鶴の、そうした職人の系譜に連なる者としての名乗りとも考えられる。刀剣とは違うが、『雍州府志』の「鞍鎧」の項目に、京都では「友真」「友重」といった名前の職人[94]の存在を紹介している。西鶴がいた鑓屋町はもとは伏見鑓屋町であり[95]、他の伏見を冠する町々同様、伏見から大坂に移った町である。伏見、あるいは京都も、西鶴のルーツの要素として検討されるべきであろう。

そして、この「鍛冶」も、眼とは浅からぬ関係がある。記紀神話に「天目一箇神」という、一つ目の鍛冶・金工の神が登場する。天津麻羅と同神である。天津麻羅の「まら」は「目占」であり、「「まら」の人名をもつものは鍛冶職である。鍛冶職は職業柄、年中火の色を観察しているので、これを「目で占う」と表現したものであろう。そのとき、片目で見つめるのだが、そのために目が次第に悪くなり、ついに失明に至る。一種の職業病[96]」という。西鶴の『一目玉鉾』は、一目みてわかるガイドブック、といった名前だと言われているが、鍛冶神の一つ目、というニュアンスも含まれているとも考えられる。

『難波鶴』に限らず、『難波雀』から『鶴跡追』まで、一連の案内記には、「入残明珍の目薬」が載っている。入れ残しは、容器の中身全部を使い切る前に治るほどよく効く、という意味である。「明珍」の由来は明らかではないが、著名な甲冑師の家名と同じである。甲冑に限らず、馬具や鍔なども製作、明珍派と称するが、鍛冶同様、職業柄、目薬を必要とすることがあったであろうし、そうしたことから目薬の名前に明珍が用いられたのではなかろうか。この目薬は「むかし入残の目薬屋の根元わづか成事なりしに[97]」と、西鶴作品にも登場する。

また、西鶴に「ふき出しの銀見る目かぐ鼻[98]」の句がある。身近に、鍛冶もしくは鍛冶に関係が深い職人たちがいたからこその句であろう。そうであるならば、彼らが負う目のリスクや治療に対する知識や関心があったと思われる。『難波雀』『難波雀跡追』では「諸商人諸職人売物所付」のなかに含まれ、『難波雀』では1名、『難波雀跡追』では6名の眼科医が紹介されていたにすぎない「目医師」が、『難波鶴』では単独の項目となって10名（改刻版では1名追加）となっている。

なお、この鍛冶の図で、相槌を打っている人物に、ふさふさとした尻尾がある。これは平安中期、京都の三条にいたという小鍛冶宗近が「小狐丸」を製作した際のエピソードを表現している。謡曲や能曲「小鍛冶」として作品化されているが、剣を打つ命を受けたが、相槌がいないことに困っていたところ、相槌を打つ者が現れ、それが稲荷明神の化身だった、というような話である。織豊期

から江戸時代初期の鐔工、埋忠明寿が、この宗近25世の孫と称しており、「刀脇指きづなおをし」として名前があがっている「ヤリヤ町　つば　埋忠数馬」は、その職種と名前からして、明寿の流れを汲む者と思われる。それゆえ、見開きの右の丁が挿絵、左の丁に「埋忠数馬」の名前が見える配置にし、相槌に尻尾をつけたのだ。西鶴とは同じ町の住人であり、また、西鶴のルーツが刀工もしくはそれに類するのならば、鐔工や刀脇差しの傷直しは、関係が深い職種である。

⑦の天満天神祭は大坂を代表する一大行事である。西鶴は、「さすが諸国の人の集り、山も更にうごくがごとく、京の祇園会、大坂の天満祭にかはらず[99]」と、江戸の日本橋の光景を語る際に、引き合いに出している。

⑧の風呂屋と⑩の新町（遊郭）、これらは西鶴の作品世界を想起させる。

⑨は、道頓堀の芝居町の光景である。左から「天下一はりま」とあるのが井上播磨掾、中央の「天下一出羽」が伊藤出羽掾、右の「やまとや」が大和屋甚兵衛である。いずれも「芝居主」の項目に名前がある。

井上播磨は名高い浄瑠璃太夫である。『西鶴諸国ばなし』では、夜、浄瑠璃の人形たちが、人間そのもののように活動している怪異が描かれた[100]。

伊藤出羽掾座では、岡本文弥が活躍していた。前述の、町浄瑠璃の淀屋三右衛門がその芸風だという文弥である。

大和屋は初代鶴川辰之介で、座本を兼任した歌舞伎役者である。『男色大鑑』巻七の三「袖も通さぬ形見の衣」や巻八の五「心を染めし香かうの図は誰」など、西鶴作品にも登場するほか、俳号を「生重」と言い、『西鶴大矢数』にも参加している。また、『難波鶴』の直後、延宝7年の8月に刊行された『句箱』は、生重をはじめ、歌舞伎関係者が西鶴と友雪を招いて興行した成果であり、「俳諧に対する役者たちのうちこみようにはただならぬものがあった」という[101]。

以上、『難波鶴』の挿絵は、蔵屋敷や祭り、町浄瑠璃など、大坂の活気を象徴するものを採用しているほか、検校の診察や鍛冶など特定の職業を描いている点に特徴がある。それは、西鶴ならではの視点にもとづくものであった。そして、風呂屋や芝居町・遊郭の挿絵は、以後の西鶴の執筆活動を予見させる。

なお、挿絵は西鶴本人の手になる可能性が検討されるべきものと思われる。西鶴作品の挿絵は描き手によって3期に分けられ、第1期の、天和2年（1682）から貞享3年までは、西鶴本人が描いたとする説[102]がよく知られている。この第1期の『好色一代男』の挿絵と、『難波鶴』の挿絵の類似点を指摘することができる。

たとえば⑨で、井上播磨掾座の前で右手を頭上にかざしている人物の手首の曲げ方は、『好色一代男』の最終場面、世之介が女護島へと船出した挿絵の、船首に立つ人物の右手首の曲げ方とよく似ている[103]。また、⑧で、ざくろ口をくぐる人物の後ろ姿が描かれているが、『好色一代男』巻1「煩悩の垢かき」の挿絵に似た後ろ姿がある。その他、人体の構造を描ききれていない拙さといっていいが、⑩の2枚のうち、百二十九丁ウの、張見世の前に立つ3人の、中央の人物の首の曲げ方や全体の姿勢は、『好色一代男』巻8「都のすがた人形」の挿絵で、遊女たちの前にいる人びとのなかで、後ろをふりむく唐人の姿勢とよく似ている。西鶴の他の作品はもとより、描き手が西鶴ではない絵との比較検討をしなければならないが、これまで西鶴作品であるという見方がなかった『難波鶴』を、西鶴作品としてとらえなおす必要があることを提起しておきたい。

Ⅳ　板元と西鶴

最後に板元だが、『難波鶴』の刊記は「大坂天神橋すし／御蔵まへ／京はん木屋／伊右衛門板」となっている[104]。「板木屋」の項目にも、「天神橋すし御蔵のまへ 京伊右衛門[105]」と記載されている。「京」ということは、大坂は出店、本店は京であると考えられる。

だが、延宝9年（1681）3月の序文があり、実質的な撰者は西鶴とされる[106]俳書『山海集』の刊記では「大坂天神橋筋御蔵前／板木屋／伊右衛門[107]」となっている。『難波鶴』にはあった「京」がない。そして元禄9年（1696）刊行の『難波丸』の「板木屋」の項目では「天神橋舟越丁　伊右衛門[108]」となる。『難波鶴』刊行後、延宝年間のうちに大坂に拠点をうつし、元禄年間には大坂の住人として落ち着いた様子がうかがえる。『難波鶴』の板元になったことが一つの転機になったようだが、伊右衛門とは、何者なのか。

『難波鶴』と刊行年が近い京都の地誌、『京羽二重』（1685年：貞享版）には、板木屋、さらには板木を彫る彫師の項目はなく、浄瑠璃屋など書肆の項目にも「伊右衛門」はみあたらない。そこで、板木屋「も」している、と仮定して『京羽二重』で「伊右衛門」をさがしてみると、「具足屋并着込」で「二条通ふや町西へ入」の「岩井伊右衛門」が、貞享版と宝永版（1705年刊）で確認できる[109]。

時代が移っていくなか、具足は需要が減り、もっと後年だが、甲冑師として名のしれた明珍家が火箸をつくる、といったような技術の活かし方があった。岩井も甲冑師として著名な一族だが、この伊右衛門が板木屋の伊右衛門ならば、板木を彫ることに、活路を見いだしたことになる。

伊右衛門が居所とするようになった舟越町は、もともとの町名は「内鍛冶屋町」だった[110]。刀を打つだけでなく、具足の金具などをつくる鍛冶もある。板木屋に転身したのだとしても、「具足屋并着込」の伊右衛門が店をだすには、ふさわしい町であろう。

また、この舟越町には、『生玉万句』や『独吟一日千句』で執筆を勤めた伊藤長右衛門道清が、内鍛冶屋町の名のときから住んでおり、『難波鶴』と『難波丸』の「能筆」の項目に、名前がある[111]。つまり、西鶴の関係者もいたということだ。

伊右衛門が所在地とした天神橋筋だが、蔵屋敷があるのは紀州藩だけであり[112]、名代及び蔵屋敷用達が日野屋庄左衛門である。西鶴が編者と思われる『難波鶴』の板元が紀州藩の蔵屋敷近くにいた、というのは、西鶴＝日野屋庄左衛門説の蓋然性を高める。

そして、延享版『京羽二重』（1745年）では「具足屋」に伊右衛門の名はなく、大坂の板木屋伊右衛門となったと思われるのだが、延享4年（1747）の大坂蔵屋敷データに、明石藩蔵屋敷の名代として「具足屋伊右衛門」が登場する[113]。『難波鶴』刊行から半世紀以上が経っているので、代替わりはしているだろう。また、具足屋にもいろいろな家系があり[114]、精査しなければならない課題はのこるが、板木屋伊右衛門のその後の出版活動が確認できないこと、『難波鶴』刊行によって、紀州藩蔵屋敷名代経験があると思われる西鶴との交流があったことからすると、明石藩蔵屋敷名代になった可能性も大きいのではなかろうか。

『難波鶴』の板元が具足屋の伊右衛門だったのならば、本来は本屋ではなかったこと、本業は西鶴のルーツと考えられる刀工との関連が深い、といった点で、のちに刊行される『好色一代男』の板元が荒砥屋だったことと、よく似ている。

ところで、先述した鍛冶の挿絵は、見開きで右側になり、左の丁は「受領刀脇差鍛冶」の項目のなかにさらにつくられた項目の、「箭根鍛冶」から始まっている。箭根鍛冶とは矢根鍛冶、鏃専門の

鍛冶屋である。ここに、俳諧の精神がみてとれるのではないだろうか。これは熊沢蕃山の『集義和書』の次の一節をふまえているものと思う。『集義和書』の初版は寛文12年（1672）、改訂版は延宝4年5月（1676）以前に刊行されている。

> 儒といひ仏と云見を立ればこそ、たがひの是非もあれ。何れの見をも忘れて、たゞ兄弟たる親みばかりにて交り候へば、あらそふべき事もなく候。こゝに職人の子共兄弟ありて、一人は矢の根かぢとなり、一人は具足屋となりたるがごとし。矢をとゞむべき、甲をぬくべきの争あらば、東西各別の他人なり。本の兄弟の親しみのみ見時は、職は各別にして、争はあるまじく候[115]。

蕃山は、儒仏、それぞれの相違をみとめあうべきであって、一致しないものを一致させる必要はない、と説くにあたって、矢根鍛冶と具足屋の兄弟を例に挙げている。鎧など具足を打ち抜かんとする鏃をつくる矢根鍛冶と、鏃などに打ち抜かせまいとする具足をつくる職人、専門性を追究する局面では対立するが、それを一旦おいて、兄弟として接する時に、争う必要はない、とする。

そこで『難波鶴』だが、西鶴の当時の居所は鑓屋町である。そして板元の伊右衛門は具足屋であるらしい。西鶴が鑓をつくっているわけではないが、鑓は鏃同様、具足をつらぬこうとするものであるし、鑓でなくても、西鶴のルーツが刀工ならば、刀も具足をつらぬくことがある武器である。編者西鶴と板元伊右衛門の組み合わせを、鑓もしくは刀と具足のとりあわせに見立て、その妙を挿絵の挿入位置で表現しているのではないか。ただし、伊右衛門が具足屋ということが『難波鶴』に明記されているわけではないので、わかる人だけにむけての、シカケである。

江戸の俳人、立羽不角編の『若みどり』（元禄4年＝1691）にも、「具足屋と職（つね）に火を摺る矢の根鍛冶[116]」という句がある。

なお、『俳諧類船集』によれば、「月」の付合に「甲の立物」があり[117]、「鎧」の付合には「鶴の毛」がある。『難波鶴』の序文署名の「友月」の月や、口絵に添えられた歌や序文につかわれていた「鶴の毛衣」は、伊右衛門の「具足屋并着込」をふまえ、具足のかぶとや鎧との付合でもあると考えられる。

おわりに――天和の笑い

延宝7年刊行の、大坂の案内記の刊行経緯や編集意図をたどると、大坂の町人社会で大きな影響力をもつ、井原西鶴の像がうきぼりとなった。新しい俳風を誹謗されながらも、俳諧の才はもちろん、それを最大限活かす自己演出にも長け、文芸の面で際立った存在であった。そしてバックボーンには、かかわりの深い職種や京都から移転した町々といった複数種のつながりをもっていた。

一方で、かつては日野屋庄左衛門として蔵屋敷名代や町年寄を務めた[118]と推定される彼は、町人社会という、いわば内部に向かっての影響力だけではなく、たとえば鶴字鶴紋禁令にもの申すような対応に見られた[119]、町人社会を代表して発信しうる立場にもいた。

ただ、こうした立場にいたのは彼ひとりではなく、たとえば本論でも名前をあげた淀屋三右衛門や、如貞こと大津屋勘兵衛などは、俳諧点者として指折りだったり、浄瑠璃が玄人はだしだったり

する一面ももちあわせる、財界の有力者だった。当然のことながら経済的に余裕があったと思われる彼らは、有徳人である。西鶴については梅宇が「有徳なるもの[120]」と表現している。

西鶴や西鶴の周辺の人びとが有徳人ならば、たとえば、天和の飢饉をどのように生き、大坂における鉄眼の救済活動をどう見ていたのだろうか[121]。地震や飢饉といった事象、また鉄眼が大蔵経開板をめざした寄進を募っていたことを詠んだ句もある。さらに、西鶴の作品において、有徳人の経済活動が、「雇用の創出」であったり、貯えた財産をつかうことが「世に金銀を還元して需要を喚起する「ほどこし」」になったりするなど、社会的な役割を果たす意義があるものとして記述されている、という指摘もある[122]。しかし、救済・再生、といった方面の発信となるとどうだろうか。

天和の飢饉と救済活動を描写した『犬方丈記』は、天和2年（1682）3月に刊行されている。その『犬方丈記』の語り手、今長明は、作中で被災地めぐりを長崎からはじめ、天和元年の10月には堺、つづけて大坂でも有徳人の救済活動を見聞する[123]。

一方、『好色一代男』の世之介が、放蕩生活を長崎で終わりにし、伊豆から女護島へと船出したことになっているのが刊記と同じ天和2年の10月である。西吟の跋文によれば、草稿の段階で、あらましを農家の女性に読み聞かせたところ、手から鍬を落とすほど大笑いした、という。跋文は寓意に満ちているようであるから、問題は、それが実話かどうか、ではない。なぜ「笑い」を跋文に書く必要があったのか、である。

その「笑い」は、春画を「笑絵」とも言う場合の、「笑い」ではなかったか。火災から守る「厭勝」として、蔵書と一緒に春画を保管したり、武家が具足櫃に春画を入れる習慣があったり、ということは、考証随筆もものした大田南畝や、博覧強記をもってきこえた北静盧などが書き記している[124]。「長持に入れると衣装がたまる[125]」という俗信もあったという。南畝と静盧の著述は、江戸時代も後期の19世紀のものだが、「武士が具足櫃の中に春画を収めておくという習慣は意外と古く、江戸時代以前にさかのぼる[126]」という指摘もある。17世紀後半を生きた西鶴の時代にはすでに、春画（笑絵）が特別な力の作用をもたらすものだと見做す習慣があったと思われる。しかも具足櫃は、刀工やそれに類するルーツをもつと考えられる西鶴や西吟には、関わりが深いアイテムである。

そして、「性的なもの」と「笑い」が特別な力として作用したということでいえば、天の岩屋戸にこもったアマテラスを引き出し、世の中に光を戻したのは、性器もあらわにアメノウズメが踊る姿に、神々が笑ったからだ、という神話が思い起こされる。

『好色一代男』跋文の彼女の笑いは、「笑い」がもつと考えられ、期待された力、「性」と「笑い」、そうしたものを表象したものだったのではないか。

なぜ、『好色一代男』が天和にあらわれ、その後好色本が流行したのか。「笑い[127]」との関連をふまえ、別稿を期したい。

註

1）塩村耕編『重要古典籍叢刊1 古版大阪案内記集成 影印篇』・『重要古典籍叢刊1 古版大阪案内記集成 翻刻・校異・解説・索引篇』和泉書院、1999年（以下、それぞれ『集成・影印篇』、『集成・翻刻篇』と記す）。

2）岩橋小彌太「難波雀類書考」（上）・（下）『歴史地理』28（1）・（2）、1916年。

3）佐古慶三編『難波雀類書考』（大阪高等商業学校大阪商史研究室）大阪史学会、1926年。

4）『集成・影印篇』91頁（以下、『集成・影印篇』91のように記す）。なお、引用にあたって、項目名は目録ではなく、本文中の記載を使用する。項目には基本的に数字が付されているが、『難波雀跡追』の増加

項目には数字が付されていないので、数字は省略する。

5）『集成・影印篇』91。

6）『集成・影印篇』110。

7）『集成・影印篇』193。

8）『集成・影印篇』193。

9）『集成・影印篇』195。

10）『集成・影印篇』193。

11）『集成・影印篇』47・50・51・113・114・115。

12）『集成・翻刻篇』100・632。

13）『集成・影印篇』2。

14）『集成・影印篇』61。

15）『集成・影印篇』40-41。

16）『〔改訂／増補〕近世書林板元総覧』〔日本書誌学大系 76〕青裳堂書店、1998 年、298・641 頁。

17）『集成・翻刻篇』629。ただし、この指摘は、序文作者が京都書肆の小嶋一族の誰かであろうという推測以外に、具体的な事実・根拠をあげられてはいない。

18）『集成・影印篇』64-65。

19）『難波鶴』には『難波雀』にはなかった「書物屋」の項目があり、「心斎橋筋　古本」という記述がある（『集成・影印篇』193）。所在地や古本という点で、『難波雀』板元の清左衛門であろうと思われるが、書肆の名前が入るべき部分は空白になっている。しかも空白になっているのは、「書物屋」の項目のなかで、ここだけである。「基本的には『雀』を覆刻（かぶせ彫り）利用」（『集成・翻刻篇』631）したからだ、という説明もできるが、清左衛門に対して、なにか含むものがあって故意に空欄のままにしたとも考えられるのではないか、と言うと、うがちすぎだろうか。清左衛門は地元、大坂の本屋である。“美をつくしていない”、という『難波雀跡追』の「難波隠士」が示した不満のようなものが、清左衛門にも向けられる、というようなこともあったのではなかろうか。ちなみに、元禄 9 年 4 月刊の『難波丸』には「書林物之本屋 古本」の項目に「心斎橋筋古本や清左衛門」とある（『集成・影印篇』496。「同（心斎橋筋）から物丁古本や清左右衛門」と改刻された版もある（『集成・翻刻篇』451））。

20）『集成・翻刻篇』「解説」では、「『雀』刊行後まもなくのことで、「糸染の嘆」（中略）というには当たらないように思う」（631 頁）としている。刊行から時間がたっていないため、さほど人びとに浸透していないので「糸染の嘆」ということにはならない、と解釈されているようだが、「難波隠士」は、『難波雀』には欠落しているものがあるので、「糸染の嘆」とはならない、と評しているのであって、刊行後の時間の長短は関係がない。

21）『新釈漢文大系第 62 巻　淮南子（下）』明治書院、1015 頁。

22）『集成・影印篇』128。

23）『集成・影印篇』129。

24）『集成・影印篇』128。

25）『集成・影印篇』215。

26）『集成・影印篇』128。

27）『集成・影印篇』128-129。

28）『集成・影印篇』219。

29）接尾辞として、動詞の連用形につく「くさす」は、「～しそこなう」「～するのを途中でやめる」といった意味がある。前者は和歌山県の一部、後者は和歌山県や高知県、淡路島や愛媛県松山などの方言である（『国語大辞典』）。

30）『集成・影印篇』218。順徳院のこの歌は、『続群書類従』（第十四輯下和歌部）では「葉末の露もこほる夜は」、『甲子夜話続篇 1』（続編巻六、東洋文庫 360、125 頁）の引用では、「葉末の月のさゆる夜は」となっている。

31）『生玉万句』『定本西鶴全集』第 10 巻、中央公論社、1954 年、27 頁（以下、同全集からの引用は、『定本 10』27 のように記す）。

32）松江重頼編『毛吹草』巻二、新村出校閲・竹内若校訂『毛吹草』岩波文庫、1943 年、91 頁。
33）中島随流「〔誹諧〕貞徳永代記」巻之二、元禄 5 年（勝峰晋風編『日本俳書大系　第 15 巻（通編）俳諧系譜逸話集』日本俳書大系刊行会、1927 年、197 頁）。
34）註 32）前掲書の解説「毛吹草の刊年及び諸本考略」494 頁参照。
35）『独吟一日千句』『定本 10』181。
36）『西鶴大矢数』巻五、第六十二、『定本 11 下』345。
37）『西鶴大矢数』巻一、第七、『定本 11 下』80。
38）『西鶴大矢数』巻三、第二十四、『定本 11 下』204。
39）『西鶴大矢数』巻四、第四十、『定本 11 下』324。
40）『集成・影印篇』182-183。
41）『集成・影印篇』底本である慶應義塾大学所蔵本は、全体的にスレのような汚れや、裏写りがあるので、国立国会図書館所蔵本を掲載した。
42）前掲註 37）の、宗先の発句に関して、「延宝七年三月刊行の大阪商工案内書『難波雀』の跡を追って、同年七月出版された類書は『難波鶴』と題され、このほか、五月刊は『難波雀跡追』、八月刊は『難波鶴跡追』と書名を名乗り、「難波雀」・「難波鶴」の両名詞を一般化したが、ここは、難波居住の西鶴を喩えて難波鶴と称した」（前田金五郎『西鶴大矢数注釈』第一巻、勉誠社、1986 年、399 頁）という注釈があるが、書名と西鶴との間に関連がある、という見方はされていない。
43）乾裕幸『俳諧師西鶴――考証と論』〔前田国文選書 1〕前田書店、1979 年、244-246 頁。尾張の俳人、下里知足の『歳旦帖（知足書留）』（早稲田大学図書館所蔵、写本）にも「大ツヤ勘兵衛如貞」とある。
44）『集成・影印篇』160・172-174。
45）芳賀一晶筆「浪華西鶴翁」野間光辰監修『西鶴』〔本篇〕天理大学附属天理図書館、1965 年。
46）西鶴は妻を亡くした延宝 3 年（1675）に剃髪、梅翁は寛文 10 年（1670）に出家している。ちなみに、『難波鶴』の「俳諧点者」に名前があがっている最初の 5 人の場合、延宝元年（1673）序の『哥仙〔大坂／俳諧師〕』の挿絵では、西山梅翁は剃髪した老人、梶山保友も伊勢村意朔も剃髪、西鶴と如貞には髷がある（『定本 10』71・73・74・77・96）。
47）『独吟一日千句』『定本 10』187。
48）上野洋三「岡西惟中年譜稿」『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室）37 巻 11 号（411 号）、1968 年。
49）延宝 7 年 12 月に、談林派の菅野谷高政の作風を、貞門の中嶋隨流が『俳諧破邪顕正』で批判したことにはじまる。当事者ではなかった惟中が隨流にむけて論駁書を発表すると、談林派から惟中を批判する書が出て、応酬があった。
50）難波津散人『〔俳諧〕備前海月』飯田正一・榎坂浩尚・乾裕幸校注『古典俳文学大系 4　談林俳諧集二』集英社、1972 年、209 頁。
51）『太郎五百韻』『定本 13』144。
52）『草枕』延宝 4 年（1676）の序の署名。
53）『わたし船』延宝 7 年（1679）の序の署名。
54）『俳諧糸屑』延宝 3 年（1675）の序の署名。
55）前掲註 49）参照。
56）野間光辰『〔補刪〕西鶴年譜考證』中央公論社、1983 年、206 頁、島居清「片岡旨恕」『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室）、23 巻 7 号（239 号）、1954 年など。
57）『集成・影印篇』294-295。
58）『集成・影印篇』149。
59）『集成・影印篇』170。
60）『集成・影印篇』182。
61）『集成・影印篇』184-185。
62）『集成・影印篇』190。
63）『集成・影印篇』190。

64）『集成・影印篇』197-198。
65）『集成・影印篇』213。
66）『集成・影印篇』213。
67）『集成・影印篇』214-215。
68）註 56）野間前掲書、林基「西鶴出自研究史の最後の言葉――野間光辰『補刪西鶴年譜考證』」（『西鶴新展望』勉誠社、1993 年、所収）。
69）『鶴跡追』の挿絵では、丸に十字らしき印は消えている（『集成・影印篇』277）。
70）『集成・影印篇』169。
71）『集成・影印篇』196。
72）『宮本又次著作集　第 8 巻　大阪町人論』講談社、1977 年（『大阪町人論』ミネルヴァ書房、1959 年を再録）、285-297 頁。
73）註 72）前掲書 300 頁。
74）『男色大鏡』巻六「忍びは男女の床違ひ」宗政五十緒・松田修・暉峻康隆（校注・訳者）『新編日本古典文学全集 67 井原西鶴集②』、小学館、1996 年、512 頁。
75）『集成・影印篇』59。
76）『集成・影印篇』60。
77）水谷不倒「〔新修〕絵入浄瑠璃史」『水谷不倒著作集』第 4 巻、中央公論社、1974 年、270 頁。
78）『好色一代男』五「当流の男を見しらぬ」暉峻康隆・東明雅（校注・訳者）『新編日本古典文学全集 66 井原西鶴集①』小学館、1996 年、157 頁。
79）寺島良安編『和漢三才図会』巻第十六「芸能」。
80）註 43）乾前掲書、235-236 頁。
81）『集成・影印篇』277 の『鶴跡追』の挿絵では、診察している人物の頭に髪の毛があるが、これはいたずら書きである。『集成・影印篇』が底本としている慶應義塾大学所蔵本は、全体にいたずら書きが多い。
82）「障害」か、「障がい」か、という、表記の問題については、さまざまな意見がある。本稿では、2019 年 10 月 1 日の変更後の法人名「日本視覚障害者団体連合」、その表記にならい、「障害」を使用する。
83）伊藤梅宇著・亀井伸明校訂『見聞談叢』岩波文庫、1940 年、243 頁。
84）（「恋病をおもへは世界の図法師しや」に続けて）「天地の二つあはす腎薬」（『西鶴五百韻』『定本 11 上』114、※腎薬＝精力増進薬）、「譬へば腎虚してそこの土となるべき事、たまへ一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」（『好色一代男』八「床の責道具」、註 78 前掲書、249 頁）、「契りを籠めて、いまだ二十日もたたぬに、我は覚えず、次第に痩するを、念比なる薬師のとがめて、脈を見るに、おもふにたがはず、陰虚火動の気色に極まり」（『西鶴諸国ばなし』巻三「紫女」、註 74 前掲書、89 頁。※陰虚火動＝腎虚）。
85）『黄帝内経・素問』「六節蔵象論」。
86）前田金五郎「『武道伝来記』の事実と創作」『近世文学雑考』勉誠出版、2005 年、261-265 頁。初出は『文学』34（7）、岩波書店、1966 年。
87）やや後の文献だが、たとえば、本郷正豊『医道日用綱目』菊屋七郎兵衛・西村源六・柏原屋清右衛門、延享 4 年（1747）。
88）『集成・影印篇』98-100。
89）『集成・影印篇』103。
90）『集成・影印篇』188-191。
91）前田金五郎「西鶴の出自――一つの想像」『近世文学雑考』勉誠出版、2005 年。初出は『専修国文』（専修大学国語国文学会）19、1976 年、152 頁。
92）西鶴自筆の書簡の所書きから、元禄 5 年ごろには「錫屋町」に転居していたと考えられている（吉田幸一「新出の西鶴書簡紹介」『西鶴研究』第 15 号［『定本 11 下』の附録］、1975 年、註 56 野間前掲書、470-474 頁）。
93）前掲註 68）参照。
94）友真の作には「桜花散文象嵌鐙」（東京国立博物館所蔵）や「葡萄銀象嵌鐙」（馬の博物館所蔵）などがある。また、『特別展　馬を飾る金工象嵌の鐙展』（根岸競馬記念公苑馬の博物館編、財団法人馬事文化財

団発行、1989 年）には、友真の他の作品や、友重の作品も紹介されている。

95）「初発言上候帳面写」大阪市参事会編『大阪市史』第五巻、1911 年、77 頁。「初発言上候帳面写」は宝暦年間に提出されたものらしい。『大阪市史』第五巻の「凡例」には解題は次巻、とあるが、その次巻は刊行されていないようだ。

96）西宮一民校注『新潮日本古典集成　古事記』（新潮社、1979 年）の「付録」365 頁。

97）『西鶴織留』巻四の二、元禄 7 年（1694）、万屋清兵衛・雁金屋庄兵衛・上村平左衛門。

98）『西鶴五百韻』『定本 11 上』114。

99）『日本永代蔵』巻三、谷脇理史・神保五彌（校注・訳者）『日本古典文学全集 68 井原西鶴集③』小学館、1996 年、87 頁。

100）『西鶴諸国ばなし』巻四「形は昼のまね」、註 74）前掲書、105-106 頁。

101）註 43）乾前掲書、241 頁。

102）水谷不倒「〔浮世／草子〕西鶴本」『水谷不倒著作集』第 6 巻、中央公論社、1975 年、120-127 頁。

103）船出の場面のこの人物の右手首の曲げ方については、伊勢物語との関連を指摘する説があるが（箕輪吉次「『好色一代男』挿絵考――『伊勢物語』の享受」『学苑』536 号、1984 年）、本稿ではこの問題には立ち入らない。

104）『集成・影印篇』215。

105）『集成・影印篇』193。

106）『定本 11 上』18-19、「解説」。

107）『定本 11 上』234。

108）『集成・影印篇』501。

109）『京羽二重』小嶋弥三右衛門･小嶋徳衛門、貞享 2 年（1685）（野間光辰編『新修京都叢書』第 2 巻、臨川書店、2002 年、226 頁。初版は 1969 年）、『京羽二重』橘屋清安、宝永 2 年（1705）、早稲田大学図書館所蔵、巻三、二十九丁ウ。

110）「初発言上候帳面写」註 95）前掲書、70 頁。ただし、内鍛冶町になっている。

111）『集成・影印篇』184・489。

112）「蔵屋敷分布図」（図 22）『新修大阪市史　第三巻』1989 年、478-479 頁、『難波鶴』の「同（諸大名）御知行付」（『集成・影印篇』141-157）。

113）竹越与三郎編『日本経済史』第 6 巻、日本経済史編纂会、1920 年、231 頁。

114）『難波丸』のⅡ次本では、明石藩の名代は「堺」の「具足や七左衛門」である（『集成・翻刻篇』375）が、京の具足屋伊右衛門との関係は不明である。なお、堺には糸割符年寄を務めた具足屋宗拠がおり、四代目の快庵の死により、跡が絶えた（『堺市史』第五巻資料編第二、176 頁）と言うが、この家が岩井だった（中田易直校訂『糸乱記』〔日本史料選書 17〕近藤出版社、1979 年、62・64 頁。『堺市史』第三巻本文篇三、381 頁）。宗拠の家系と伊右衛門との関係も、未詳である。

115）『集義和書』巻第一書簡之一、後藤陽一･友枝龍太郎校注『日本思想大系 30 熊沢蕃山』岩波書店、1971 年、22 頁。

116）立羽不角編「若みどり」下巻、鈴木勝忠校訂『雑俳集成　第 2 期 5　不角前句付集 1』、東洋書院、1991 年、20 頁。

117）高瀬梅盛『俳諧類船集』巻三、寺田与平治、延宝 4 年（1676、序文は延宝 5 年）。註 32 前掲書の『毛吹草』では「鎧立物（よろひのたてもの）」となっているが、立物は甲につける飾りであるので、間違いであろう。ちなみに、『毛吹草』の各伝本のうち、「鎧」と「立物」の間に空白があり、別々の語句として記述としていると思われるものに、早稲田大学図書館所蔵本（寛文 12 年刊、西沢太兵衛、請求記号：ヘ 05-02925）がある。また、「鎧」のふりがなは「よろひ」で「立物」とは別々の語として記しているようでもあるが、「鎧立物」と、「鎧」と「立物」の間に空白がなく、一語扱いに見える書き方をしている一例にお茶の水女子大学附属図書館所蔵本（明暦元年刊、請求記号：C21/837/1-2）、「鎧（よろひの）立物」と、明らかに一語扱いしている一例に北海道大学附属図書館所蔵本（請求記号：L-1・32-MA）がある。

118）註 68）林前掲書、51 頁の註 67）。

119）上安祥子「鶴字鶴紋禁令が元禄期の社会に与えた影響について」『立命館大学人文科学研究所紀要』122

号、2020 年。

120）註 83）前掲書、243 頁。

121）高橋俊夫「西鶴二題」（『近世文芸』21、1975 年）で、同様の発問がなされている。ただし、「西鶴の意識の構造を計るに、一つの資料にもならんか」（22 頁）という趣旨で書かれていて、西鶴が鉄眼の業績にはふれず、ただ鉄眼堂を名所として記述した、と指摘するにとどめられている。

122）小室正紀「経済思想としての井原西鶴」『三田学会雑誌』108 巻 2 号、2015 年、290-291 頁。

123）「犬方丈記」下『假名草子集成』第 4 巻、東京堂出版、1983 年、169-171 頁。

124）大田南畝『南畝莠言』巻之上、六十二「具足櫃に春画をいるる」文化 14 年（1817）、北静盧『梅園日記』巻一「春画十八」弘化 2 年（1845）。

125）「《座談会》春本文化」の、延広真治氏の発言。『文学』（季刊）第 10 巻第 3 号、岩波書店、1999 年、9 頁。

126）早川聞多『春信の春、江戸の春』文春新書、2002 年、31 頁。

127）天和 2 年から 3 年にかけての火災の見聞や放火犯の情報などが書かれている『天和笑委集』も、「笑」である。注目すべきものの一つであろう。書名は「幕府当局の無策ぶりに対する風刺的な意味合いが込められていると考えられる」（丹羽みさと「『天和笑委集』の特徴――「八百屋お七」を中心に」『立教大学日本文学』89 号、2002 年、100 頁）という見方があるが、春画（笑絵）が火除けの厭勝になるという慣習があるのならば、この「笑委」にも、火除けの意味が含まれているのではないかと考えられる。なお、成立は柳亭種彦が貞享年間（1684-1688）と推定しているが（国立国会図書館所蔵本の識語、『新燕石十種』第 5、国書刊行会、1913 年、139 頁）、さらに後年の歌舞伎や浄瑠璃の影響、補筆も指摘されている（矢野公和「「八百屋お七」は実在したのか」『西鶴と浮世草子研究』Vol.4、笠間書院、2010 年、有働裕「『天和笑委集』の諸本と成立について」『愛知教育大学大学院国語研究』24 巻、2016 年）。

（本学文学部授業担当講師）